

*十字架上のイエスのことばは7つあるが、そのうちの3つはヨハネが記している。「女の方。そこに、あなたの息子がいます。そこに、あなたの母がいます。」のあと、「わたしは渇く。」と言われた。詩編69:21のみことばの成就である。

そして、3つめ、最後の言葉は「完了した。」であった。神の御子イエスが地上にやって来られてその使命を完全に成し遂げられたという意味である。

*十字架刑のからだは、本来ならそのままさらしものにされるところであった。「しかし、その日は過ぎ越しの安息日という特別な日であったので、ユダヤ人たちは遺体をすぐに降ろして処理をしたいとピラトに願った。「しかし、イエスのところに来ると、イエスがすでに死んでおられるのを認めたので、そのすねを折らなかつた。しかし、兵士のうちのひとりがイエスのわき腹を槍で突き刺した。すると、ただちに血と水が出て来た。」(ヨハネ19:33~34) ヨハネはこの「血と水」を福音書全体で特別な意味を持たせている。血は「あがないの血」である。ユダヤ人たちは、自分の身代わりに動物の血をそそいで罪の赦しを得た。しかし、今やイエス・キリストが十字架にかかり、その血によって信じる者の罪が赦されるようになったのである。水は「水と霊によって生まれる」(ヨハネ3章)や「生きた水」「永遠のいのちへの水」(ヨハネ5章)のように、新しく霊的に生まれることや、永遠のいのちを表わすものである。

*イエスの埋葬に携わる二人の弟子。アリマタヤのヨセフは「イエスの弟子であったが、ユダヤ人を恐れてそのことを隠していた。」(19:38) 彼は、金持ちの国会議員であり、立派な正しい人でイエスのことを信じ、神の国を待ち望んでいた。自分のために用意していた新しい立派な墓にイエスを丁寧に埋葬した。ニコデモはユダヤ人の指導者で、以前からイエスに関心がありイエスを訪ねた人。最初は理解できなかったが、弟子となり、自らの手でイエスを埋葬するほどになる。二人ともイエスが神の子であり、自分は弟子であることを勇敢に公に表した。イエスの死は自分が生きるためであった。

*ヨハネは、はっきりと自分の目で見て、聞いたことを記している。イエスの十字架も復活も事実であり、神の救いの計画の中で起こったできごとであった。私の罪の問題を解決し、神との関係を良い状態に保つためには、イエスが私のために十字架にかかってくださったことを信じる必要がある、不可欠である。